第821号 平成25年10月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

YOUTH CLUBの新たな試み
全国から集う安全登山普及講習会

YOUTH CLUB委員長　野沢誠司

9月19～23日、YOUTH CLUBの企画により、剱岳において「安全登山普及講習会」が開催された。若手育成、将来のリーダー養成という本会の目的に適う有意義な研修であった。その模様を、YOUTH CLUB委員長・野沢誠司会員より報告いただく。

国立登山研修所の後援を得て、YOUTH CLUBの企画により、9月19～23日にかけて「全国安全登山普及講習会」を実施した。期間中は好天に恵まれ、本会の在京および各支部の若手・中堅会員が剱岳東面に集まってバリエーション・ルートを登った。登攀技術の向上を図り、最新の技術・理論による安全登山の技術を習得することができ、また、将来のリーダー養成にも資する講習会となった。今回の経験が伝習教育として、各支部に還元されることを期待する。

国立登山研修所の協力の下、総勢36名が参加、無事に下山

参加者は総勢36名で、概要は次のとおりである。

YOUTH CLUB青年部10名／東海支部8名／四国支部4名／石川支部1名／北九州支部1名／本部スタッフ7名／山岳ガイド3名／登山研修所スタッフ1名

宿泊は、国立登山研修所の全面的な協力を得て、剱沢の登山研修所夏山前進基地を利用させていただいた。

9月19日には先発隊17名が、21日には後発隊19名が入山した。20～22日には、ガイドやスタッフをリーダーとして数名ずつのパーティに分かれ、北方稜線、源次郎尾根、八ツ峰上半、Ⅵ峰フェース、本峰南壁を登った。22日、全員が無事に室堂に下山した。

前進基地にて全員集合。背後は剱岳

個々人にとっては、本番の山岳登攀を経験することにより、登攀技術、ロープワーク、コミュニケーションなど学ぶべき事柄が明確になった。さらに将来のリーダーとして、雪渓歩き、ルート・ファインディング、ペース配分、危険箇所での判断、疲労時のメンバー状態把握など、総合的な力を身につける必要性も学ぶことができた。

また、通常は交流が難しい他支部の青年層と交流ができたことにより、よい刺激となった。今後の情報交換に活かせるであろう。

2013年（平成25年）
10月号（No. 821）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

YOUTH CLUBの新たな試み
全国から集う安全登山普及講習会‥ 1
第7回三国学生交流登山の報告‥ 4
支部活性化のための施策について‥ 6
オリンピックと登山‥‥‥‥‥ 6
平成25･26年度新役員紹介 ‥‥ 9
辻村伊助の遺稿「續スウィス日記」‥ 10
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 11
　旧立山道ウォークについて
　新日本三景、吾妻山の隠沼
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
　資料映像委員会／集会委員会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
　茨城支部
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
さんけん通信‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
図書交換会出品目録および購入申込みの案内‥ 20
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥ 22
日本山岳会所蔵資料紹介 No.6‥ 23

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時

各パーティの時間記録および自己評価

各パーティの時間記録と自己評価は次のとおりである。

●9月20日

【北方稜線（1泊2日）】

5名（スタッフ2、青年部2、東海1）

20日5時30分出発→10時15分・仙人峠→11時30分・池ノ平小屋（泊）

21日5時20分出発→6時50分・小窓→9時・三ノ窓→10時・池ノ谷乗越→12時・剱岳→15時40分・前進基地着

青年部2人はトップを歩き、ルート・ファインディングのよい練習となった。東海メンバーは剱岳の雪渓、岩稜の初経験となった。

剱岳本峰にて東海支部のメンバー

【源次郎尾根】

3名（ガイド1、青年部1、北九州1）

4時25分出発→5時20分・源次郎尾根取付→9時20分・源次郎Ⅱ峰懸垂下降→11時05分・剱岳本峰→14時・前進基地着

ルート・ファインディング、ロープワークが身についた。ガレ場での落石防止が課題。

【八ツ峰上半】

4名（東海）

3時30分出発→8時・Ⅴ・Ⅵのコル→12時・剱岳本峰→15時・前進基地着

夜明け前の行動で取付点を探すのに手間取ったが、その後の行動はスピーディに運び、リカバリーができた。

【Ⅵ六峰Cフェース】

3名（ガイド1、青年部2）

4時15分出発→5時20分・長次郎谷出合→7時30分・Cフェース取付→9時20分・剱稜会ルート終了点→10時35分・Ⅴ・Ⅵのコル→12時30分・長次郎谷出合→14時・前進基地着

本番のマルチピッチを経験できた。下りでの落石防止が課題。

●9月21日

【源次郎尾根】

3名（ガイド1、青年部1、研修所1）

4時20分出発→5時20分・源次郎尾根取付→8時・Ⅰ峰の頭→8時55分・Ⅱ峰懸垂下降地点→11時・剱岳本峰→15時・前進基地着

将来のリード役を意識した行動ができた。本峰で北方稜線組、南壁組と落ち合えて楽しかった。

Ⅵ峰Cフェースを登攀中

【Ⅵ峰Cフェース】

3名（東海）

3時45分出発→6時10分・Cフェース取付→9時・剱稜会ルート終了地点→13時下降開始→15時30分・前進基地着

Ⅴ・Ⅵのコルへの下降点を見つけるのに手間取った。ルート・ファインディング力が課題。

【本峰南壁】

2名（ガイド1、青年部1、スタッフ1）

4時20分出発→7時30分・南壁A1取付→10時55分・剱岳本峰→15時・前進基地着

浮石が多く、ロープの動きによる小石の落石があった。

●9月22日

【源次郎尾根】

6名（東海）

3時20分出発→4時15分・源次郎尾根取付→6時40分・Ⅰ峰→7時15分・Ⅱ峰→8時25分・剱岳本峰→11時15分・前進基地着

新人にとっては本番での懸垂下降、危険地帯通過時のフィックスなどがいい経験となった。パーティとしての行動はスピーディであった。

【源次郎尾根】

3名（スタッフ1、青年部2）

7時出発→7時40分・源次郎尾根取付→10時30分・源次郎Ⅰ峰→11時20分・Ⅱ峰懸垂地点（先行パーティ待ち）→13時30分・剱岳本峰→13時50分下降開始（渋滞）→17時40分・前進基地着

疲労時に足運びが雑になり、ペース配分の重要性がわかった。本峰からの大渋滞には難渋した。

【源次郎尾根】

3名（スタッフ1、四国1、石川1）

7時出発→7時40分・源次郎尾根取付→10時30分・源次郎Ⅰ峰→11時20分・Ⅱ峰懸垂地点（先行パーティ待ち）→13時30分・剱岳本峰→13時50分・下降開始（渋滞）→17時40分・前進基地着

落石防止の重要性を再認識した。

【源次郎尾根】

4名（スタッフ1、青年部1、四国1、ガイド1）

7時出発→8時40分・源次郎尾根取付（旧ルート）→10時30分・源次郎Ⅰ峰→11時20分・Ⅱ峰懸垂地点（先行パーティ待ち）→13時30分・剱岳本峰→13時50分・下降開始（渋滞）→17時40分・前進基地着

源次郎の渋滞を避けるために遅い出発としたことは正解であった。

【Ⅵ峰Aフェース】

2名（青年部）

3時20分出発→4時30分・長次郎谷出合→6時10分・Aフェース基部→7時・登攀開始→8時15分・魚津高ルート終了点→10時10分・Aフェース基部→11時45分・長次郎谷出合→13時15分・前進基地着

青年部2人で登攀をすることができた。最終ピッチでの意思疎通がうまくいかず、ギアを落としてしまったことが最大の反省点。

【Ⅵ峰Dフェース】

3名（ガイド1、青年部2）

3時30分出発→6時40分・Dフェース基部→9時・久留米大ルート終了点→12時・Aフェース基部→15時30分・前進基地着

マルチピッチのロープワーク、浮石の処理、雪渓対処などがいい経験となった。

【Ⅵ峰Dフェース】

2名（青年部）

3時20分出発→6時30分・Dフェース基部→10時40分・久留米大ルート終了点→15時30分・前進基地

青年部2人での登攀。アプローチでの体力に課題を感じた。

【本峰南壁】

2名（ガイド1、四国2）

3時10分出発→4時35分・前剱→5時45分・南壁A2取付→8時・剱岳本峰→10時・一服剱→10時50分・前進基地着

初めてバリエーション・ルートから剱岳に登頂でき、A2の快適な登攀を楽しむことができた。

中堅・若手育成の輪を全国へ

YOUTHプロジェクトが始まって4年が経った。最初のころは「街の山岳会の長老が入る山岳会が日本山岳会だろ?」と言われてきた。「山岳会」と名前が付いているのだから、現役で登れる者が半分はいなくては、ということで、「39歳以下青年部」と「59歳以下WV部」を設立した。現在、本部青年部35名、WV部50名。東海支部学生部100名、青年部30名と、参加者は順調に推移している。

予算をいただいての事業であるので、地方の中堅・若手育成の機会を作りたいと思っていたが、今回初めて、本部・東海以外にも声をかけ第1回を実施することができた。東海支部の高橋青年部長は若手精鋭を募って参加され、日ごろの鍛錬の結果が出たことで、レベルの高さを感じさせられた。また、新設間もない四国支部からは尾野支部長が引率して参加、若い力と今後の伸長を感じさせるものがあった。

Ⅵ峰にて登攀準備中

本部青年部も「MAKE THE LEADER」をモットーにリーダー育成に努めてきた甲斐があって、安全に配慮しながら少しずつ前進している。この企画が実現したのは、本会が若手の育成を方針として掲げ、公益社団法人として全国展開している組織だからである。また、事故・遭難防止の観点から国立登山研修所のリーダー研修を全国に伝播させる可能性を示唆できたと思う。今後は四季を通じて、国立登山研修所とのコラボを企画しており、今回参加できなかった支部には、ぜひ中堅・若手の派遣をお願いしたい。

この企画は、特に国立登山研修所の渡邊所長、東専門職には多大なるご支援・ご協力をいただきました。また富山県警察山岳警備隊の高瀬隊長、飛騨小隊長にも大変お世話になりました。さらに本会所属のプロガイドの皆さん、本会役員を中心とする本部スタッフの皆さんの献身的な協力がなければ、無事に遂行できなかったでしょう。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

Report

第7回　三国学生交流登山の報告

YOUTH CLUB　学生部部長　中山茂樹

3度目の日本開催となる、第7回三国学生交流登山が8月16日～21日の日程で開催され、無事終了することができた。ここに報告させていただく。

今年の三国学生交流登山は、クライミング大会と富士登山を2つの柱として展開した。

まずはじめに、今回の交流登山において全日程の宿泊場所、クライミング大会の会場などをご提供いただき、全面的にご後援を賜った学校法人神奈川大学に厚く御礼を申し上げる。

到着初日の歓迎会

関東の大学山岳部ＯＢ有志の集まりである「メトロ会」にもご寄付を賜った。また、常日ごろお世話になっている日本山岳協会にもご後援を賜った。ここにご披露し、御礼申し上げる。

神奈川大学キャンパスにてクライミング大会開催

8月16日、中国隊(学生10名、引率4名)、韓国隊(学生10名、引率5名)を、成田と羽田のそれぞれの国際空港で迎えた。日本隊は若干の出入りがあったが、おおむね学生11名、スタッフ5名の態勢で応対した。

夕刻より歓迎会を開催。神奈川大学・石積勝学長、日本山岳協会・神崎忠男会長、神奈川県山岳連盟・大曾根弘会長、神奈川大学学士山岳会・菊池稔会長をはじめ、本山岳会の役員ら大勢の参加もいただき、盛会であった。

翌日、17日は神奈川大学のキャンパス内にあるクライミング・ボードで三国学生によるクライミング大会を行なった。これは、昨年から始まった学生部主催のクライミング大会の第2回に相乗りした形の開催となった。お盆休みにもかかわらず正式な上級資格を持つセッター、審判、そしてビレーヤーとして10名の献身的なご協力を賜ることができた。このクライミング大会には日本フリークライミング協会、神奈川県山岳連盟にご後援をいただいた。

神奈川大学で行なわれたクライミング大会

中国、韓国の学生から11人が出場し、日本からは9大学から30人が参加、総勢41人で、トップロープ、リードの各部門で競技が行なわれた。中国、韓国の学生もずいぶん健闘したが、上位は日本勢が占める結果となった。それでも中国の女子、馬麗娟がリードの部で2位に入り存在をアピールした。また、韓国チーム、中国チームのそれぞれ2人に敢闘賞が贈られた。

上位成績は次のとおり。

■第1部　男子リード
第1位　山内誠(神奈川大)
第2位　大谷拓海(東京理科大)
第3位　山本桂太朗(慶大)
■第2部　男子トップロープ
第1位　鍋田拓洋(慶大)
第2位　生井武龍(神奈川大)
第3位　中野征四郎(慶大)
■第3部　女子リード
第1位　安田あとり(神奈川大)
第2位　馬麗娟(中国)
第3位　林田早紀子(慶大)
■第4部　女子トップロープなし
■団体対抗戦
男子団体：優勝　神奈川大学
マムート賞
女子団体：優勝　神奈川大学
マムート賞

また、次の企業から大会賞品のご提供を受けた。ご紹介して謝意

を表する。

MAMMUT　SPORTS　GROUP　JAPAN㈱
㈱ダックス
㈱ICI石井スポーツ
㈱カモシカスポーツ
㈱好日山荘
㈲さかいやスポーツ
㈱デサント（マーモット）
㈱山と溪谷社
㈲ユングフラウ

メインイベントの富士登山に加え箱根観光、東京観光も満喫

18日は神奈川大学箱根保養所に移動した。道中、午前中はアサヒビール神奈川工場の見学とビールの試飲を楽しみ、同施設内のレストランでバーベキューをいただき、午後は箱根へ移動して箱根ロープウェーで大涌谷へ。その周辺の散策をし、箱根ビジター・センターを見学した。

中国にも韓国にも活火山はなく、地面から噴煙が沸き起こる様子を間近に見ることができて、皆さんには大変貴重な体験となったのではないだろうか。

19日は、いよいよメインイベントの富士登山である。大変良い天気に恵まれ、吉田口でプロの富士登山ガイドとして活躍している青年部、菊地信宏さんの参加を得て彼に先導してもらい、大変よいペースでほぼ全員が登頂を果たした。上りは富士宮口から登ったが、下山路は上部を御殿場コースにとり、宝永火口を回って元の富士宮口へと戻った。

早朝から快晴の青空の下、一面に広がる雲海や、頂上に登らなければ見られない御鉢の中、宝永火口などを目の当たりにして、皆には大変喜んでもらえたようだ。帯広畜産大学から単身参加してくれた学生も、初めての富士登山に少し興奮気味であった。

富士山頂にて

この日も箱根保養所に泊まり、翌20日はバスで東京観光に出向いた。浅草で仲見世、浅草寺を見学の後、昼食にてんぷらを食べ、秋葉原で買い物をするなど、この日も東京観光を堪能してもらえたことと思う。

最終日のお別れ会にて。すっかり打ち解けた一同

最後の夜はお別れ会を催したが、この5日間の親交の結果、和気藹藹、ずいぶん賑やかなお別れ会となった。三国の学生がひとつになって登る様子は感動的でさえある光景であった。

そして21日、大きなトラブルも事故もなく無事に全日程を終了し、中韓の友人を見送り第7回の日中韓三国学生交流登山は成功裏に終了した。

最後の挨拶の際、次回開催国の韓国代表から、次回からマレーシアと台湾に声をかけて応諾をいただければ、5ヶ国の交流としたいとの申し出があり、中国、日本とも異存のないことを申し伝えた。

すでに学生間では、10月や11月に韓国での岩登りの計画が具体化しており、今後の学生交流に期待が持てる。

最後に申し上げたいことは、今回のこの交流登山を成功に導いたのは、日本隊の学生諸君による、時間をかけた周到な準備の賜である。参加した青山学院大学、帯広畜産大学、神奈川大学、東海大学、武蔵野大学のそれぞれの山岳部の皆さんに敬意と謝意を表する（※）。

※クライミング大会には、文中で示したとおり、ほかに多くの大学山岳部、山岳部外の大学生の参加があった。

Report

支部活性化のための施策について

支部活性化プロジェクトチーム（ＰＴ）　担当理事　森　武昭
ＰＴリーダー　宮崎紘一

支部活性化ＰＴでは、これまでの６年間にわたって支部を増やすことにより活性化を目指してきた。その成果として、２００７年に栃木、千葉、茨城の各支部が誕生した。そして10年には、東京多摩、埼玉の各支部、さらに12年に四国支部、13年に群馬支部が誕生した。このように、これらの新しい支部が活発な活動を行なっていることは周知のとおりである。大きな空白エリアは、東京区部と神奈川県だけになっている。

このような状況を受けて、13年６月に就任した新会長は、引き続き支部活性化を重要項目としてあげ、自らが担当理事を務めることとした。そして従来の量的拡充から、質を高めることに力点を置いて以下のような２つの施策を提案し、理事会の承認を得て、動き出したところである。

第１の施策は、支部所属新入会員を対象とした入会金の一部を当該支部へ還元する制度の導入である。すなわち、入会金の20％（４千円／人）を支部へ還元し、支部活動の活性化に役立てようとの考えである。具体的には、13年度の対象者には14年度予算で、14年度の対象者には15年度予算で配算するものである。当面はこの２年間の試行とし、その成果などを考慮して継続した制度とするかを理事会で検討することにしている。

第２の施策は、支部主催の事業で、会員増強や若手のリーダー育成に繋がるような良い企画に、資金的援助をする制度の導入である。具体的には、趣旨に沿った申請に関して１件20万円／年（特に優れたものは50万円／年）を上限として助成するものである。申請にあたっては継続性を考慮して、１件で最長３年にわたって助成を受けられるようにしている。申請は４半期ごとの締め切りとし、理事会で審議し決定する。審査のポイントは、新規性、有用性、将来展開、外部資金導入の可能性などとし、申請した支部の現況も考慮して支部活性化ＰＴの見解を添えて理事会へ提出することにしている。

なお資金援助の新規申請は、当面13～15年度とし、成果などを考慮して継続するか否か検討することにしている。申し込みおよび成果報告書の様式はすでにホームページからダウンロードできるようになっている。

これらの施策が有効に機能するには、支部会員の積極的な活動参加が必須であり、活性化の一助になることを期待している。

Opinion

オリンピックと登山 そしてスポーツクライミング

日本山岳会元副会長・日本山岳協会会長　神崎忠男

２０２０年の東京オリンピック開催が決まり、希望と期待に胸がふくらみます。しかし同時に、「これからが大変」という自覚も持たなければならないと思っています。「オリンピックと登山」という言葉に違和感を覚える人もいることと思いますが、ここでは競技にノミネートされた「スポーツクライミング」に注目し、オリンピックと登山について考えてみたいと思います。

競技にノミネートされたスポーツクライミング

スポーツクライミングがオリンピックにノミネートされたことで、スポーツクライミングの発展、進化に目を向ける時代がきました。

スポーツクライミングは数年前、すでに公式オリンピック競技種目として国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）からも認可されていますが、いま現在、競技種目が多いと言われている大会のプログラムに、スポーツクライミングが入れないのが現状です。大会に参入したい競技は、スポーツクライミングのほかにもたくさんあるからです。

この現実を踏まえてＩＯＣは、２０２０年のオリンピック大会から新しい競技種目を参入させるという方針で、スポーツクライミング、レスリング、野球、スカッシ

ュ、空手、武術、ウィークボード、ローラーボードの8つの新たな競技種目をノミネートしました。

しかしすでに報道されているとおり、第1次選考審査でスポーツクライミングは落選、レスリング、野球、スカッシュの3競技が第2次選考に進み、ここにきて東京オリンピック開催決定と同時に、レスリングが再度正式なオリンピック競技種目に決まりました。

多様化する「登山」。競技登山も、ひとつの登山スタイルに

ここで考えられるのは、「スポーツクライミングがオリンピックにノミネートされた」ということ自体の認識を、重要視しなければならないことでしょう。

一方、「スポーツクライミングは登山でない」という声も聞かれます。確かに、今までの登山のなかで考えれば違和感があります。しかし約100年前、宗教登山者もまた、新しいスポーツ登山に違和感があったかもしれません。

物事の概念は、時の流れとともに変化や進化を遂げるものです。スポーツクライミングは、登山の新しい分野として若い人たちに好まれ親しまれ、広く普及しています。私たちはこの事実を前向きに受け止め、登山もまた時代とともに多様化するのだ、と捉えるべきでしょう。

登山を一つの枠のなかで考えることは難しい時代です。ひとつの考え方としては、登山を大きく3つのジャンルに分け、「より高くより困難に」を求める今までの探検冒険的アルパイン登山を「卓越登山」、「より楽しくより安全に」を目指す中高年登山を「健康登山」、そして「より高くより速く」と技術を競う「競技登山」とします。そしてそのなかで自分に合う登山に親しみ、楽しみながら発展に携わっていくことが、これからの登山者の道とも考えます。

本年8月に開催されたＪＯＣジュニアオリンピックカップにて

国際競技としてのスポーツクライミング、その黎明期の歩み

スポーツクライミングの過去の実績を振り返ってみると、1980年中盤あたりからフランス、オーストリア、イタリアを中心としたヨーロッパの国々から普及が始まり、当初は国際フリークライミング連盟（ＩＦＦＣ）が主体となって普及に取り組み、いちはやくＩＯＣにオリンピック競技種目としての認可、ゲームへの参入を申請しました。

しかし当時のスポーツクライミングはまだまだ発展途上にあり、競技大会などを開催している国も少なく、組織も国際的な体制も整っておらず、オリンピックの対象としては遠い存在にありました。

ＩＯＣは、当時約70ヶ国・90団体近い加盟国数を持ち、歴史と伝統のある「国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）」を通してのスポーツクライミングの普及振興を進め、申請を求めたとも聞いています。ＩＦＳＣは、早速、ＵＩＡＡの加盟団体としてオリンピック競技参入の体制を整えていきました。

当時、日本からは私がＵＩＡＡに出席していました。少なくとも35ヶ国以上の国で世界選手権やワールドカップといった大きな国際大会が開かれていないとオリンピック競技参入は難しいと言われ、その普及振興に力を入れだしたのが、80年代後半から90年にかけてであります。

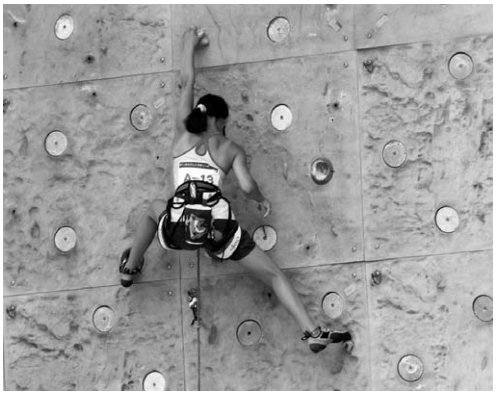
あるとき突然、ＵＩＡＡのアジアの加盟国が香港に集められ、アジア地域におけるワールドカップ開催の要請がありました。どの国も経験や資金の面などから開催を立候補する国はなく、会議場はシーンと静まり返って発言する雰囲気がありませんでした。

すると突然、ＵＩＡＡのポール・ブラッセ・クライミング委員長（フランス）が「アジアのなかで開催できる可能性の大きい日本にお願いできないだろうか」と、口火を切ってきました。私もそんな予感がしていましたが、当時の日本開催は困難な状況下で、「日本開催と言われると困るな」と思っていた矢先のこの発言でした。しかも

これがきっかけとなって、アジア各国から「日本にお願いしたい」「お願いします」の日本開催コールに、私の心の動揺が大きかったことを今でも鮮明に記憶しています。

と言いますのも、日本を出発するときに日本山岳協会会長から「ややこしいこととお金のかかることは、絶対に受けてこないように」としっかり言い聞かされて出かけて来ていたのです。私はあくまで、「日本は開催はできません」としか答えられませんでした。

この香港会議は結果を見ずに終わりました。日本に帰ってこの報告をすると「受けて帰らなくてお見事」とほめられましたが、自分の気持ちは穏やかではありませんでした。



当時、日本はＵＩＡＡ16ヶ国の理事国の一国であり、アジアにおける登山の普及発展への貢献については、アジアの国々は言うまでもなく、世界的にも大きく期待されていました。ましてヒマラヤ登山や海外登山の実績、日本国の経済事情からも、日本はもっと国際貢献や奉仕活動に力を入れてもらいたいという雰囲気が、ＵＩＡＡのなかで伝わってきました。「日本は外国の山に登りっぱなしで国際的な貢献や奉仕をしていない」とはっきり言う外国人もいました。

しかし日本の海外登山経験者にそんなことを言っても通じるわけがありません。国際理解、国際理念が乏しいと言ってしまえばそれまでですが、やはりこのころから国際交流や国際的な意識を正しくしっかり持ち、いろいろな国と一緒になって物事を考え、実行、活動していかなければ、自分たちの進展も発展もない、置いていかれる……という思いが湧いてきました。登山界も国際化し、ボーダーレスの時代を迎えていたのです。

私自身、スポーツクライミングは経験も知識もありませんでしたが、これからの登山界のことを考えると、スポーツクライミングのワールドカップ日本開催を、どうしても実現させたいと思い続けていました。そこで以前からヒマラヤ登山などでお世話になっていた読売新聞社を訪ねて、ワールドカップ日本開催の要請をダメモトでお願いしたところ、快く引き受けてくれ、当時の登山を取り巻く環境は一変しました。91年、代々木公園の屋外の子どもプールに仮設のクライミング壁を造り、アジアで初めてのスポーツクライミング競技のワールドカップを開催するに至りました。

20年前のワールドカップ大会開催が、今のオリンピック競技参入の道につながったかと思うと、当時の苦労を忘れさせてくれます。

スポーツクライミング今後の発展と展望

その後、スポーツクライミングがオリンピック競技に認可され、国際スポーツクライミング連盟（ＩＦＳＣ）がＵＩＡＡから独立し、スポーツクライミング競技に集中して運営、普及振興に携わり、現在に至っています。2年前には、「オリンピック・ドリーム２０２０」をテーマに、ＩＦＳＣおよびＵＩＡＡがスポーツクライミング競技のオリンピック参入に強い意欲で臨んできましたが、いましばらくの時間がかかる結果となりました。

しかし、オリンピック競技参入には関係なく、スポーツクライミングは若い人たちの間で間違いなく飛躍的に普及しています。日本でも高校野球やサッカー、ラグビーと同様な「全国高等学校選抜クライミング選手権大会（高校クライミング）」が年に1度開催され、今年は第5回を迎えます。このように普及の過程を見ていると、スポーツクライミングが競技種目に参入するのも時間の問題、と受け止めています。

体制づくりが遅れる国を支援し、より多くの国々の参加を

今年の初め、カンボジアに山歩きに出かけました。カンボジアには、いまだ登山文化がありません。ストックを突いて、スパッツを着けた日本からの登山集団を見た現地の人たちは、何しに来た？　と

興味と疑惑の目で見ていました。

しかしこの国にも、スポーツクライミングを楽しむ若者がいました。整った施設もなく、指導者も乏しいなかで、一生懸命ボードをよじ登る姿に感動しました。話を聞いてみると、練習用のクライミング・ボードはあっても公式な大会が開けるような施設はなく、またそのような公式大会を見たことも出たこともない、一度公式の国際大会を見てみたい、できれば出場してみたいとジェスチャーを交えて訴えるように話していました。

これがきっかけとなって、今年8月、富山県南砺市で開かれた「JOCジュニアオリンピックカップ」に、監督1名、高校生選手2名をカンボジアから招聘しました。

成績はいまひとつでしたが、この経験や体験はカンボジアのクライミング事情に大きな刺激になったことは間違いなく、カンボジアのスポーツクライミングの発展につながればと期待しています。

オリンピックにスポーツクライミングがかなり近づいてきたことを嬉しく思い歓迎する一方で、国によってはスポーツクライミングの体制づくりが発展途上にあり、オリンピックに出場したくても出られない国があります。特にアジアでは、発展途上国と先進国の差が大きく、オリンピックに参加したくてもできない国々を置き去りにして、オリンピック競技種目として参入を果たしていいのだろうか？　という疑念もあります。先進国が発展途上国に支援する体制を整え、より多くの国の参加のなかでオリンピック競技としての実績を築いていきたいものです。

先般、カナダで国際スポーツクライミング大会が開催され、日本は金・銀・銅のメダルをとるという好成績を残しました。日本選手のランキングは世界的にも高いところにあり、スポーツクライミングがオリンピック競技になればメダルをとれる可能性が高く期待される種目のひとつとなることでしょう。2020年、スポーツクライミング競技はオリンピック競技種目に参入はできませんでしたが、東京にオリンピックが来る以上、オリンピック競技ではないからといって日本の登山界は知らん顔もしていられないでしょう。オリンピックの開催と同時に、国際的スポーツクライミング競技大会の東京開催に世界の目が向けられることを覚悟しながら、7年後の東京オリンピック開催に大きな期待をしています。

平成25・26年度　新役員紹介

①会員番号、②役職、
③担当委員会、PT、WGなど

勝山　康雄（かつやま・やすお）

①8772
②理事
③集会委員会、資料映像委員会

私が山を意識したのは小学生のころでした。担任が「上田哲農」さんだったことも、影響しているかもしれません。大学山岳部に入部、学生部役員から青年懇談会（現・青年部）とJACライフを開始。その後平成になってから行なった海外遠征で事故に遭い、JACから少し距離をおいていました。

どんなジャンルの登山も好きですが、最近2年間、夏山シーズンに山で生活し、登らなくても山中の環境に浸ったり、眺めるだけでも幸せなことに気がつきました。

集会委員会の担当は2度目ですが、旅行会社のツアーとは違う、各委員会とジョイントした企画を提案したいです。資料映像委員会では、歴史あるJACならではのコンテンツを、低コストで有効に活用・公開できる道を探って参ります。

ヒストリー

辻村伊助の遺稿「續スウィス日記」

三好まき子

当会の図書室の奥深くに、木彫の箱が大切に保管されている。その箱の中にしまわれているのは、革の表紙で製本された一冊の本である。表紙にはスイス国旗を模したと思われる十字の中に「續スウィス日記――辻村伊助手稿」と記され、ページをめくると淡いブルーのペンで書かれた原稿が現れる。

この木箱に収められた革表紙の原稿が、当会に納められるまでの長い物語を語る前に、原稿の主である辻村伊助について触れなければならない。

辻村伊助が、シベリア経由でヨーロッパへ旅立ったのは、ちょうど100年前の1913（大正2）年の、それもまさに10月20日のことである。今の私たちとおなじ秋の風を感じながら、秋色の敦賀から出航したと思うと感慨深いものがある。

翌年の1月にフランスを経てスイスに入った辻村は、ユングフラウとメンヒに登り、厳冬のアルプスに日本人として初めて足跡を残す。またその夏には、グロース・シュレックホルンの登山中に雪崩に遭って骨折で入院、そこで出会ったスイス人看護師の女性と結婚。そして1年近い遊学を終え、彼女を伴って帰国してから著したのが『スウィス日記』である。

さて、1923（大正12）年9月1日、彼が帰国して9年後。彼と妻はかわいい盛りの3人の男の子をもうけ、箱根湯本で幸せな生活を営んでいた。そこに起こったのが関東大震災だ。決壊した貯水池からの泥流が辻村の家を襲い、家族全員が命を失う。そして駆けつけた親戚によって掘り起こされたのが、冒頭の辻村直筆の「續スウィス日記」の原稿である。ちなみに、5人の遺骨が発掘されたのはその3年後である。

辻村伊助家族

掘り起こされた「續スウィス日記」は、辻村が『山岳』に寄稿するつもりで書いていたもので、原稿用紙には「『山岳』原稿用紙」と印刷され、その住所には「木暮方」の文字が読みとれる。木暮理太郎が『山岳』編集を担当していた時期だ。

当の遺稿は伊助の兄から親友の高野鷹蔵に贈られ、彼から山岳会の図書室に寄贈されることになるのだが、その前に高野は伊助の友人らにその装丁を依頼することにする。藤島敏男が中心となり、若くして逝った友を偲んで、中村清太郎（表紙）、石崎光瑤（見返し）、茨木猪之吉（絵と題字）らが心のこもった美しい一冊を作った。そして、佐藤久一朗が彫った木箱に収められたのだった。

續スウィス日記　遺稿

誰に頼んでどう作ろうかと思案していて、図書室に寄贈するのに20年もたってしまった、と高野が語るが、おかげで遺稿は太平洋戦争の戦火で焼けることもなく残った（当会の図書室は灰燼に帰した）。いくつもの不思議な偶然が重なって、遺稿は今に至っている。

この辻村伊助の遺稿「續スウィス日記」が、伊助の故郷・小田原の市立文学館の特別展「辻村伊助　アルプスに挑んだ小田原の登山家」で展示中。当会からは、ほかにも写真や資料を出展し協力している。日本アルプス探検時代に開拓の足跡を残したパイオニアの生涯と業績が展示されているので、秋の一日、ぜひ足を運んでほしい。

また、伊助や従弟の辻村太郎ら一族の歴史をたどった清水敏一著『辻村家の物語』（大雪山房）が図書室に寄贈されたのは奇遇。辻村理解の手助けになる好著である。

〈期間：10月19日㈯～12月15日㈰、場所：小田原文学館（小田原市南町2-3-4）電話0465（24）1055〉

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

旧立山道ウォークについて

田中純夫

この8月、富山で開催された「第10回旧立山道ウォーク」に参加してきた。富山市八尾に在住する40年来の岳友に誘われてである。登山というより、歴史ある立山の旧登拝路を、富山市役所前から雄山頂上まで、徒歩で歩き通すということに惹かれたのである。

事業は、富山市と富山市体育協会の主催、共催として富山県山岳連盟、富山市山岳協会などが加わる。さらに立山関係の地元企業やマスコミなどが、協賛として名を連ねる。参加者は総勢１００人を超え、地元中学生も一定枠参加している。

今回は多発した雷を伴うゲリラ豪雨に見舞われ、初日はほとんど歩けず、電車やバスによる移送となった。２日目は、それでも弘法から室堂まで、予定の半分ほどは歩けた。最終日は、途中で雨に降られたが、全員無事に雄山に登拝し、とにかく頂上だけは踏めた。

最近、立山や剱岳一帯には話題が多い。

まず、立山弥陀ヶ原・大日平がラムサール条約の登録湿地となった。

また、雄山東側斜面の御前沢雪渓、剱岳北方稜線の三ノ窓雪渓、小窓雪渓の三雪渓が国内初の現存「氷河」と認められた。

さらに、立山の歴史と立山信仰や自然を紹介している立山博物館に、「山岳集古未来館」が富山県の事業として開設された。ここでは、歴史的に形成された芦峅寺の山岳文化や明治以降の立山・黒部をはじめとする日本の登山史や登山文化を紹介している。

しかし何よりも、今回、このウォーク事業に参加して最も感銘を受けたのは、この企画の視点が極めて明確であるということであった。富山の人々は中学生くらいまでに、ほとんどが立山に登拝するという。そうした伝統を踏まえて、広く開かれた事業へと立山登拝を顕彰、継承していこうという思いに貫かれていたのである。だからこそ富山の、越中の、そして古来日本人の立山に対する思い、歴史、伝承、そのなかで育まれてきた立山登拝などが伝わってくる。

この事業を立ち上げるにあたっての企画検討の場には、山岳関係者として本会会員の木戸繁良氏、立山信仰や伝承・歴史の第一人者である廣瀬誠氏が参画していたという。これを聞き、立山を歩いて登ることの意味がしっかりと押さえられていたことを、筆者は納得した。そして、実行委員の方々から発せられる言葉が、「登山」とか「登頂」ではなく、「登拝」であったのも印象に残っている。地元の人たちが立山登拝を守り、顕彰し、伝承していこうとしているのである。

10年にも及ぶこの事業は、富山市当局の絶大な支援に支えられているという。事業関係者に敬意を表するとともにうらやましくもあったが、仄聞するに、この事業は10年目を機に、今後のあり方に検討を加えるという。

筆者はかつて新潟市主催の登山講座（通年、岩雪含む）に長く係わったことがあるが、10年を過ぎたあたりで行政の見直し対象となった。山岳で事業を実施することの難しさを十分に承知しているつもりだ。部外者がとやかく言うことではないが、この事業への一参加者として、こうした立派な事業のあることを会員諸氏に伝えるとともに、山岳をテーマとする事業の企画の参考としていただきたく、筆を執った次第である。

雄山「登拝」を終えて室堂平での集合写真

新日本三景、吾妻山の隠沼

大内賢治

吾妻山系の一切経山（1949㍍）の東端にある吾妻小富士の南西に位置し、浄土平に形成された小火口内に、清冽な濃紺の水をたたえた湖面標高1600㍍、径300㍍、最深13㍍ほどのすり鉢状の湖沼「桶沼」がある。

碩学の文芸評論家・山本健吉氏（1907～1988、1983年文化勲章受賞）は、桶沼について『いのちとかたち――日本の美の源を探る――』（新潮社）の〈序章　那智滝私考〉のなかに次のように述べている。

「ある雑誌社の座談会で、司会者が何の予告もなしに、出席者たちに日本三景を新しく選んでほしいと言いだした。その時私の頭に、まっ先に浮かんできたのは那智滝である……」と、第一節は滝についての考察を述べている。

そして第四節に、「あとの二つは、日本が火山列島であることから、私は火口湖を日本的な風景と思うから、その一つとして、吾妻山系浄土平に近い桶沼を選んだ。びっしりと樹の覆ったごく小さい丘で、その中で石楠の花が美しく、頂上に達するとすぐ眼下に桶状の急に深くなった小沼をたたえていて、その突然の出現に驚かされる。萬葉でいう隠沼（こもりぬま）とはこれかと思い、隠沼という言葉には、こんもりとした樹々の中での出会いへの意が籠っていることに気づく。

もう一つは、半自然とも言うべきだが、日本の代表的な樹木は松柏類だから、私の知る一番立派な松原として、唐津の紅の松原を挙げた。

あの海岸の、すこぶる層の厚い松原は、幕藩時代に玄海の風を防ぐ防風林として大切に育て上げられたのだろう。

昔の人のこうゆう自然への心づかいを見ると、今日の私たちの心ない自然破壊がつくづく反省させられる……」。

右の萬葉でいう隠沼は、『萬葉集』第十一巻――二四四一に、

〈隠り沼の　下ゆ恋ふれば
すべをなみ　妹が名告りつ
ゆゆしきものを〉

「隠り沼の」は、下ゆ恋ふの枕詞。流れ口のない淀んだ泥沼で人目につかないようにしみ出るものなので、ひそかに思うことの比喩とした。

「隠り沼の」ひそかに心の中で恋していると、どうしようもなく苦しくて、つい妹の名を口に出してしまった。忌み慎むべきものなのに、と詠っている。

桶沼は、1959（昭和34）年に開通した「磐梯吾妻スカイライン」の浄土平のすぐ隣にあるが、樹木に覆われたこの小火山は、人々の足を遠ざける。そのため、観光客に吾妻小富士ほどに知られておらず、今もなお、神秘的な自然を保っている。

びっしりと樹々に覆われた桶沼

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会

中国登山協会よりDVD寄贈さる

「チョモランマ登頂50周年記念DVD」3枚セットの寄贈がありました。ご活用ください。（管理番号00351）

（荒井真二）

集会委員会

キルギス天山展望トレッキングとトルガルト峠越え
――天空の楽園を行く

6月27日～7月8日、ツアーに参加した。メンバーは男女各7名に、同行ガイドの15名である。成田から北京・ウルムチ経由で、28日にビシュケクへ。翌日、車で突厥時代の遺跡などを見ながら、かつてシルクロードの天山北路で名高いイシククル湖（海抜1600㍍、琵琶湖の9倍）南岸の町・カラコルに着いた。

湖岸からA、Bの2班に分かれ、A班は12名でトレッキングに。旧ソ連の軍用トラックを利用してカラコル谷の2550㍍まで入り、2950㍍のシロタ・キャンプ、3550㍍のアラクル湖、さらに3860㍍のアラクル峠を越えてケルディック谷（3300㍍）キャンプへ。最後に牧草地と針葉樹の中を温泉のあるアルティン・アラシャン（2560㍍）へ下るというもので、テント泊4日間。傾斜はきついが種々の草花が咲き、5000㍍級の山並みと氷河や氷河湖を眺めながらの山歩きは爽快そのもの。ヨーロッパの客が多く〝中央アジアのスイス〟と呼ばれるのもうなずける。

あまりなじみのないキルギスであるが、日本の2分の1の面積に550万の人口、国土の45㌫が3000㍍以上の高地という、緑豊かな高原の国である。1991年に旧ソ連から独立を果たした国のひとつでもある。人々は質朴で人なつこく、親しみやすい。

天山山脈トレッキング・アラコル峠を越えケルディック谷キャンプ地にて

トレッキングの後は再びB班と合流し、国境のトルガルト峠（3752㍍）を越えて、中国・新疆ウイグル自治区西端の町・カシュガルへ。1泊2日でカラクリ湖（3600㍍）を往復し、湖畔のパオに泊まる。パミールの高峰、ムスターグ・アタ（7546㍍、父なる氷の山の意味）を心ゆくまで眺めた。

山岳美の素晴らしい旅であった。

（中川智康）

B班3名は、イシククル湖南岸の道をバルスコン村（1650㍍）に向かった。農業と牧畜の村で、南側を山に囲まれている。村内にはきれいな小川が流れ、多くの花が咲き誇り、まさに桃源郷である。村人も温かく、農家の庭先を眺めていると家の中に招き入れ、ごちそうしてくれるほど純朴な人たちである。食事の際は、宿の主人と奥さんが流暢な英語で客をもてなしてくれる。

翌日は、村の南側にあるバルスコン峠に向かう。九十九折の道でぐんぐん高度を稼ぎ、1時間ほどで3000㍍を超えると、高原大地が広がった。高所でのこのよう

な広大な景色の広がりは、ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤでも見たことがない。高原には幾筋もの川が流れ、羊や牛が草を食んでいる。突き抜けるような青い空と爽やかな空気のなか、高原のドライブを堪能した。

翌日はソンクル湖に向かう。ソンクルとは最後の湖の意味で、標高3016㍍の湖水は、透き通って実に美しい。湖の周りは広々とした草原と丘、ゆったりした時間が流れ、まさに天空の楽園である。

我々はこの地で、ユルタと呼ばれる遊牧民が使用する移動式住居に2泊した。ユルタのすぐ裏の丘に登ると、雄大な展望が広がる。樹木の生えない（標高が高いため）緑の高原、水天一碧のソンクル湖。湖の遥か向こうには、天山山脈の雪山が連なる。エーデルワイスなどの高山植物が咲き乱れるなか、花を踏みつぶさずに歩くのは難しい。昼は雄大な自然の中でのトレッキングや乗馬を楽しみ、夜は満点の星空を堪能した。

この美しい自然が壊されないよう祈りながら、ソンクル湖をあとにした。

（山下秀一）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

茨城支部

第9回茨城県自閉症協会への協力登山

茨城県自閉症協会との協力登山は、平成16年8月の富士登山から始まり、岳沢小屋、三国山、磐梯山、奥白根山などに登った。今年は7月20日～21日、茨城県自閉症協会夏期療育年長キャンプが開催され、27名の参加があった。特別参加の賛田評議員と支部員8名態勢で対応し、平標山登山に協力した。

自閉症は、広汎性発達障害の一つで、人との関わりに著しい障害が見られるもので、身体的コミュニケーションの著しい障害、友だちができない、楽しみを分かち合おうと人のもとに来ることがない、気持ちを通じ合わせられないなどの症状を持つ。そこで私たちは、参加者の登山経験や症状を知るため、当日のバスの中で各人を観察し、夕食を共にして登山日の班編成に備えた。

22日、大型バスで谷川岳ロープウェー駅に向かった。3班に分け、ゴンドラに乗車する。晴天の中、天神平のお花畑を1時間ほど散策、笑顔が見える。17時、宿泊先の猿ヶ京温泉へ。入浴などの自由行動の後、18時夕食。希望者はカラオケで元気に歌う。真剣に歌う姿に感動した。

23日、平標山登山口を8時出発。班編成を考えていたのだが、会員9名で前後をサポートして行動することとした。長袖の着用、虫除けスプレー持参、かや付き帽子の着用など、虫に刺されないよう注意を促す。11時、参加者全員が無事に山頂到着。美しい高山植物の中で昼食をとる。登山行動は心配なさそうなので、下山は山の家を経由し、登山口へ16時着。入浴後、帰路へ。21時、水戸ドライブインで解散する。

帰路のバスの中、参加者から、「大変楽しい療育キャンプでした。山岳会の方々の安全登山への真摯な姿勢に、いつもながら頭が下がります。プロの方たちと一緒だからこそ安心して登山に挑戦できることを、今回も痛感しました。親子ともども、身体を使って楽しい経験を集団で行なう意義はとても大きいと思いました」との発言があった。

茨城支部としては、登山支援のお役に立つことで、公益社団法人としての事業活動を続けていく所存である。

（諏訪　肇）

茨城県自閉症協会夏期療育年長キャンプ

図書紹介

『立山ガイド史』

五十嶋一晃・著

2013年8月
五十嶋商事刊
A5判 779ページ
定価 4515円

2009年の映画「剱岳　点の記」では、柴崎測量隊で大きな役割を果たした大山村の宇治長次郎が一躍有名になった。

この年『山案内人宇治長次郎』を上梓した五十嶋一晃氏は、富山県旧大山村の出身。実家が立山線の終点（当時）粟巣野駅前で商店・食堂を営み、立山案内人組合の詰所にもなっていた。そこで、芦峅ガイドをよく知ることとなる。

そんな著者には、長年立山ガイドの歴史をまとめたいという熱い思いがあった。「立山ガイドは、登山の脇役として日本の登山史に燦然と輝いている。全国に名を馳せた立山ガイドの活動は、一つの文化的な遺産でもあろう（はじめに）」。

8月に発行されたこの本は、「立山連峰に関わる将来のデータベースとしての役割を果たしたい」との著者の思いがにじみ出た労作で、座右におけば頼もしい参考資料となろう。780ページの大冊だが、文字が大きくて読みやすい。

本書は、立山信仰で登拝登山の案内を務めた「中語」の時代から、近代登山における初登頂時代の裏方としての活動、さらに登山形態が多様化する現代まで、時代の推移の中で立山ガイドの歴史を多角的に捉えるものである。

「立山ガイドの特性・起源」から説き起こし、「近代登山の黎明と山案内」、「山案内人の組織化」、「積雪期登山と岩登りへの対応」などの章が続く。

「主な登山案内・遭難救助」、「悲惨な出来事」の章は、多くの記録や紀行文から引用されていて、ここはまさに日本山岳会の歴史と重なる部分でもある。

続く「芦峅ガイドの系統と系譜」は、作成に15年以上を要したという。山案内人の古老が少なくなった現在、著者にしかできない貴重なデータとなっている。

次の「現代の立山ガイド」では、100余年の伝統を引き継いで、第一線で活躍する現在の立山ガイド協会が紹介される。

後半は「近代登山前史・職業登山」、「登山道開さく・交通網の拡充」、「山小屋・施設の設置」、「山岳遭難防止・救助」など、広範囲の項目が並ぶ。

特に立山連峰の山小屋の変遷をまとめたリストや新道の開拓、交通機関の敷設リストなどには、大変興味をそそられる。

今回割愛された項目も多く、著者自身があとがきで述べているような続編「立山ガイド史　Ⅱ」の発行の早からんことを期待している。

（山田信明）

『一歩ずつの山歩き入門』

四角友里・著

2013年7月
枻出版社刊
A5判 208ページ
定価 1260円

「山ガール」という言葉が新語・流行語大賞にノミネートされた2010年前後から、山にはカラフルな出で立ちの女性登山者が増えている。

そんな山ガールたちに人気の「アウトドアスタイル・クリエイター」として、山登りの楽しさを広めるべく活動しているのが著者である。日本ではほとんど知られていなかった山スカートを広める活動を行ない、アウトドア・ウェアメーカーとのコラボレーションで女性向けウェアをデザインするなど、機能性を第一に置きながら、山を楽しむための提案を続けている。

本書は、日帰りから2泊3日までの山行を目標に、女性の山デビューを応援する入門本。元インドア女子にして体力ゼロだったという著者が、10年間山と付き合い、失敗も重ねながら培ってきた知識と

【さんけん通信】
水問題改善プロジェクト始動！

9月も半ばを過ぎると、上高地はすっかり秋の空気です。朝晩はかなり冷え込んで、早朝の河童橋には霜が降りる日もあります。

この夏も山研の生活用水を取水している善六沢の状態が悪く、取水停止の日が続き、利用者の皆さんにはご不便をおかけしました。

平成5年に利用を開始した現在の山研は、善六沢の上流約500m地点の水源より取水しており、これまで取水口の改良や浄水タンクの設置、管理人による日常のメンテナンスにより安定した水の供給に努めてきました。ところが、7年前の大豪雨および4年前の土石流の発生以降、大量の土石が取水口直近まで到達したため、少しの雨でも水が濁り、山研の運営に恒常的な影響を与えるようになりました。

善六沢からの取水に代わる生活用水確保の手段、すなわち井戸の掘削、水道設備の敷設等については過去にも委員会で検討されましたが、国立公園内という規制の厳しい立地条件、工事費用の問題等により頓挫した経緯があります。しかしながら、今後も長期にわたり沢水に頼ることはリスクが大きいこと、大雨の都度、管理人が単独で水源を巡回し復旧作業に従事することは安全面での懸念があります。そこで、プロジェクトチームを立ち上げ、安定した水の確保を目標に①井戸の掘削、②水道設備の敷設の2案の対応施策について、改めて検討を行なうこととしました。

管理人による復旧作業

今年度は、上高地旅館組合の方々や水道組合からの情報を収集し、監督官庁への届出事項の確認、概算費用を含めた具体的プラン策定を進める予定です。

（山研運営委員会　柴山信夫）

技術を丁寧に解説している。ノウハウ本ではあるが「プロから素人へ」の上意下達式ではなく、自身がどんなふうにトライ&エラーを繰り返し、快適な山行スタイルを手に入れたのか。全体を通してその過程が描かれており、とても親しみやすい。

構成は「プラン」「山ウェア」「山道具」「歩き方」「山小屋」の5章立て。身の丈に合った山や道具を選ぶコツや、必要な装備一式、起こり得る危険の避け方、おいしい山ごはん、山小屋での過ごし方に至るまで、基本的な知識が豊富な写真とイラスト入りで紹介されている。

憧れの穂高へ登るためのステップを7つに分けたというエピソードや、トイレや体調管理、スキンケアのことなど女性ならではの悩みにも言及。快適な登山のためのアドバイスも多い。

また、雑誌のようなレイアウトで、カワイイ尽くしの山ウェアや山道具を紹介しているのも大きな特徴。

着付け講師もしていたという著者による山ウェア着回し術は、「疲れていても華やかな表情に」「荷物を増やさず気分を変えたい」などファッション誌ばりのオシャレ感。機能性を第一に、女子力も忘れず目一杯山を楽しみたいという気持ちが伝わってくる。

自然が好きだけれど、山の始め方が分からない。そんな初心者にとって、等身大の言葉で背中を押してくれる本書は気持ちをほぐしてくれるはずだ。山歩きの一歩を踏み出すための一冊として適している。

（松原　梓）

会務報告

平成25年度第5回（9月度）理事会議事録

日時　平成25年9月11日㈬19時～21時30分
場所　日本山岳会集会室
【出席者】森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、川瀬・大槻・落合・直江・野口・山賀・山田各理事、浜崎・吉永各監事
【欠席】勝山理事
【オブザーバー】柏編集人
【審議事項】

1・支部事業への助成金制度について（森）

支部活性化のため、平成25～27年度の支部事業（新規申請）への助成金制度が資料により提案された。（承認）

2・「プロジェクトチーム等規程」制定について（高原）

会長が指示する特命事項を遂行するため必要に応じて設置するプロジェクトチーム及びワーキンググループの効率的な活動に資するため規程を制定する。（承認）

3・小島烏水祭（四国支部）の管轄について（高原）

小島烏水祭は、平成26年度より日本山岳会主催、四国支部主管とする。（承認）

4・入会希望者について（高原）

33名の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1・日本山岳協会・東京都山岳連盟との関係について（森）

日本山岳協会からの団体加盟要請及び現在加盟している東京都山岳連盟との関係の見直しについて、今までの経緯を含め今後の方向について、資料に基づき協議した。評議員懇談会での意見を踏まえて次回10月度理事会において審議事項としたい。

2・上高地山研における水の確保について（大槻）

上高地山研の水源となっている善六沢からの飲用水等の確保が困難となっていることから、水確保対策として、上高地右岸水道組合への加入による水道の利用等について具体化を検討することとした。

【報告事項】

1・第4回（7月度）理事会（平成25年7月10日開催）議事録に記述漏れがあり以下の追加があった。（高原）

「審議事項5・海外登山助成金について、次の2隊に対し助成金を交付する。①登高会（慶応大学山岳部ＯＢ会）による四川省横断山脈②ギリギリボーイズによるパタゴニア・フィッツロイ山群」

2・「理事・理事会の職務と責任」について、監事から資料により説明があった。（吉永）

3・各ＰＴ・ＷＧからの報告

①１１０周年記念事業（黒川）

8月29日、第3回準備会を開催した。第1次答申を10月常務理事会に行ないたいが、内容は山を含めてあまり絞り込まないようにしたい。国内事業、式典などについては1年前に決めたいが、幅広く話を深めていきたい。骨子案を示す。

②国土地理院対応ＷＧ（佐藤）

・国土地理院から、2万5千分の1地形図の見直しに伴う登山道情報の提供について協力要請があった。

・電子国土賞２０１３（国土地理院主催）は、現在までのところソフトウェア等の推薦がない。当会の締切りは過ぎているが推薦があれば、便宜を図りたい。

4・第7回日中韓三国学生交流登山の実施状況等について資料により報告があった。（古野）

5・支部等における本年度の寄付金受け入れ状況について報告があった。（吉川）
6・税額控除申請の手続きを9月中に実施することについて報告があった。（吉川）
7・評議員及び理事による名誉会員推薦についての説明があった。（高原）
8・評議員懇談会を9月27日に開催する。（高原）
9・上高地山研テラスの手摺が腐食し危険なため、本年度予算に基づき改修工事の発注をした。（大槻）
10・福島支部からの設立年月日のHP記載の訂正依頼があり、確認の結果以下のとおり訂正した。「福島支部設立年月日：昭和22年12月7日」（高原）
11・102号室で保管の資料等保全のため、事務局において、空調管理と専用ノート設置によるセキュリティ対策を行なうこととした。（高原）
12・当会入会案内パンフを改訂した。（高原）
13・当会ルーム空調工事（今秋工事予定）は、現在、複数社から見積を取っている。（高原）
14・会費請求書式を来年度より改定する（払込先をゆうちょ銀行とする）。（高原）
15・本年度の役員名簿は9月中に発行予定である。（高原）
16・当会の理事会開催通知は、前月議事録に開催日・議題等記載して行なう。（高原）
17・欅平ビジターセンターにおける当会所蔵物展示の際の使用許可条件を変更した。（高原）
18・立山博物館より当会所蔵16ミリ「別宮貞俊の立山・黒部」の借用依頼があり承諾（高原）
19・㈱日本郵趣出版より、当会所蔵書籍掲載許可申請があり承諾（高原）
20・小田原市より当会所蔵の辻村伊助に関する資料等の貸出依頼があり承諾（高原）
21・㈱山と溪谷社より当会所蔵『山岳』よりの写真掲載願いがあり承諾（高原）
22・エクアドル大使館・ヒマラヤ観光開発㈱よりの講演会等の名義後援依頼があり、営業行為部分を除く講演会について承諾。（高原）
23・（一財）日本山岳スポーツ協会等よりの第21回日本山岳耐久レースへの名義後援依頼があったが、自然保護、安全登山等の観点から検討を要するため、関連団体との意見等も踏まえて対応する。（高原）
24・本年度、内閣府による立入検査が予定される。別添に示す検査内容につき、各委員会そして担当理事に協力をお願いしたい。（高原）
25・各支部に事業計画、報告に関する日程を通知する。（高原）
26・長野県山岳遭難対策協会より山岳ヘルメット着用奨励山域の指定等があった。（高原）
27・「山」9月号の案内及び広告掲載社募集について説明があった。（柏）

【今後の予定】
1・第50回学生部マラソン大会　11月9日㈯
2・平成25年度安全登山及指導者中央研修会　11月8日㈮～10日㈰
3・第1回アジア国立公園会議（環境省）〈基調講演　11月13日㈬於仙台〉
4・田淵行男記念館・3人による写真展　9月3日～3月23日
5・次回理事会開催案内

ルーム日誌 9月

2日　総務委員会
3日　二火会　図書委員会　スケッチクラブ
4日　YOUTH CLUB　集会委員会
5日　家族登山普及WG
6日　海外委員会　九五会
9日　常務理事会　図書委員会　資料映像委員会　スキークラブ　高尾の森づくりの会
10日　山岳研究所運営委員会　青年部　スケッチクラブ
11日　理事会　休山会　山想倶楽部

日本山岳会団体傷害保険
加入のおすすめ

加入対象者（被保険者）：日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい！

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先
東京海上日動火災グループ代理店　**株式会社東海日動パートナーズ東東京**
団体傷害保険資料請求担当：藤田　Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808　FAX.0120-161-809

12日　山の自然学研究会　フォトビデオクラブ　山岳地理クラブ
17日　総務委員会　00会　公益法人運営委員会　スキークラブ
18日　二火会　三水会　つくも会
19日　自然保護委員会　科学委員会　支部活性化ＰＴ　みちのり山の会
20日　家族登山普及ＷＧ
21日　ＳＵＮ燦会
24日　ＤＭ委員会　１１０周年記念事業実行委員会
25日　自然保護委員会　麗山会
26日　フォトビデオクラブ　学生部　山遊会
27日　評議員懇談会
30日　総務委員会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ

9月来室者　490名

会員異動（9月分）

物故

百瀬　孝（2735）　13・8・15
石坂久忠（4101）　13・8・31
早川瑠璃子（4719）　13・9・19
望月計市（5157）　13・8・14
大野栄二（6867）　13・9・20

退会

和地陽二（6118）

図書受入報告（2013年9月）

編　著　者	書　　名	ページ／サイズ	発行元	刊行年	寄贈／購入別
中西健夫	山の本をつくる	282p／22cm	ナカニシヤ出版	2013	著者寄贈
中西健夫	山の本をつくる（特装版）	282p／22cm	ナカニシヤ出版	2013	著者寄贈
全日本山岳写真協会（編）	山稜2013：2013年全日本山岳写真展作品集（撮影地図付）	190p／22cm	全日本山岳写真協会	2012	発行者寄贈
かんべ ひろみ	もりのおくりもの	22cm	文芸社	2012	著者寄贈
竹内洋岳	頂きへ、そしてその先へ	159p／19cm	東京書籍	2013	出版社寄贈
古山勝康	白い沙漠と緑の山河：南極！！極寒のサバイバルを支えた酒と食	191p／21cm	雄山閣	2013	著者寄贈
デナリパブリッシング（編）	星降る彼方に：藤田弘基追悼	239p／27cm	茂市久美子(私家版)	2013	発行者寄贈
Stephen Goodwin (ed.)	The Alpine Journal 2013 (Vol.117, No.361)	456p／23cm	The Alpine Club	2013	発行者寄贈

＊故・西堀栄三郎会長のご遺族様より「森林・草原・氷河（茗渓堂 1966年刊）」他、計54冊のご寄贈図書がございました。ありがとうございました。

No.	書名	著者/編者	発行	備考	価格
405	ナンダ・コット登攀	竹節作太	大阪毎日新聞社	S12　函	1500
406	アルプス記　新版	松方三郎	龍星閣	S49　函	1000
408	登山の先駆者たち	熊原政男	校倉書房	S38　函	700
409	小島烏水　山の風流使者伝	近藤信行	創文社	S53　2刷	700
412	GREAT KARAKORAM	白籏史朗	朝日新聞社	1993　カバー	800
413	GREAT HIMALAYA	白籏史朗	朝日新聞社	1993　カバー	800
418	山へ　わが登高記	吉沢一郎	文藝春秋	1980　カバー　※献呈署名あり	700
419	たった一人の山	浦松佐美太郎	文藝春秋	S16　初版	700
422	山と探検	今西錦司	文藝春秋	S45　カバー　※献呈署名あり	700
429	黒部渓谷　岩橋崇至写真集	岩橋崇至	山と渓谷社	1987　カバー　※著者署名あり	700
437	日本百名山	深田久弥	新潮社	S51　22刷　函	1000
454	アルプ　218　特集　辻まこと		創文社	1976	600
472	アルプ　300　終刊号		創文社	1983	600
477	遊歩百山　1～12	森林書房/編	山と渓谷社	1990～1995	一括3000 各号300
489	会津の山々・尾瀬	川崎隆章/編	修道社	S36　函	700
490	星と嵐　―六つの北壁登行	レビュファ/著　近藤 等/訳	白水社	1967　9刷　函　※著者署名あり	1000
491	アルプス記　新版	松方三郎	龍星閣	S49　函	1000
492	山と渓谷	田部重治	第一書房	S11　カバー	700
493	尾瀬　鬼怒沼	武田久吉	梓書房	S5　函	700
494	立山群峯	冠松次郎	第一書房	S4　函	700
503	山行	槇　有恒	改造社	T12　5版	800
504	山行	槇　有恒	改造社	T12　5版	800
505	白馬連峯と高瀬渓谷	冠松次郎	梓書房	S10　函	700
508	氷河の山旅	田中　薫	朋文堂	S18	700
509	山・人・本	島田　巽	茗渓堂	1976　函	700
519	日本山岳名著全集1～12	田部重治・尾崎喜八・深田久弥/監修	あかね書房	1967～1968　函	3000
540	別冊太陽　人はなぜ山に登るのか	大森久雄・横山厚夫/編	平凡社	1998	800
565	ケルン　復刻版　1～10・解題	ケルン編輯室	アテネ書房	1978　函	5000
576	岳人講座1～4	諏訪多栄蔵ほか/編	東京中日新聞出版局	S40・41　函	1000
580	若き日の山	串田孫一	実業之日本社	S47　函	700
581	心の歌う山	串田孫一	実業之日本社	S49　函	700
582	山のパンセ	串田孫一	実業之日本社	S47　函	700
584	八ヶ岳挽歌	山口耀久	平凡社	2002　2刷　函	600
585	北八ツ彷徨	山口耀久	平凡社	2002　3刷　函	600
588	山岳講座1～6	川崎隆章・近藤等/編	白水社	1954　函	1200
589	覆刻　日本の山岳名著全23巻・解題	日本山岳会/編	大修館書店	S50　函	一括15000 各700
613	新選覆刻　日本山岳會會報　101～200	日本山岳会/編	大修館書店	S53　函	700
614	新日本山岳誌	日本山岳会/編	ナカニシヤ出版	H17　函	5000
615	槇有恒全集Ⅰ～Ⅲ	槇　有恒	五月書房	1991　函	1500
616	忘れえぬ山Ⅰ～Ⅲ	串田孫一/編	筑摩書房	S34　函	1200
617	若き日の山	串田孫一	実業之日本社	S55　函　2刷	600
618	あの頃の山登り－北海道の山登り	橋本誠二	茗渓堂	2003　函　特装版　限定外7/10	2000

●頒布価格が500円以下の和書と、洋書を省略しています。全目録はホームページ（図書委員会）から検索できます。また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

●目録の申込み、問合せは三好まき子まで　TEL (090-8019-8601)　✉344mm@mbe.nifty.com

図書交換会出品目録および購入申込みの案内

今年度の「図書交換会」の出品点数は過去最高の700冊を超えました。昨年に続き、年次晩餐会で「図書交換会」を開催します。多くの会員の参加をお待ちします。

交換会当日の詳細は22ページの「インフォメーション」に掲載していますが、当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

●郵便（日本山岳会･図書委員会あて）またはメール（344mm@mbe.nifty.com）で、11月15日までにお申込みください。
●購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本（★印1～5）の場合も、入札価格を明記のうえ、同じ要領でお申込みください。
●複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は、図書委員が代行します。
●全集やシリーズ本の申込みは、一括購入が優先となります。
●購入図書の送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

No.	書名	著者/編者	発行	備考	価格
★ 1	一登山家の思ひ出	ジャヴェル/著　尾崎喜八/訳	龍星閣	S12　※函なし	最低価格3000から入札
★ 2	山の風流使者	小島烏水	岡書院	S24　函	最低価格5000から入札
★ 3	岳書縦走	雁部貞夫	ナカニシヤ出版	2005　特装版　限定70／125　天金　函	最低価格5000から入札
★ 4	山の憶ひ出　上巻・下巻	木暮理太郎	龍星閣	S13・14　函	最低価格4000から入札
★5	年報獨標　1　1954 ～ 1957	獨標登高会	校倉書房/発売	S34　函	最低価格3000から入札
11	山を行く	高畑棟材	朋文堂	S5　函	600
12	尾瀬	平野長英・川崎隆章	龍星閣	S15　函	600
14	原野から見た山	坂本直行	朋文堂	S32　函	800
22	登山の小史と用具の変遷	西岡一雄	朋文堂	S33	1200
23	山　―研究と随想	大島亮吉	岩波書店	S13　7版　函	1000
32	山　第1巻～第5巻	---	梓書房	S9 ～ 11	7000
150	車窓の山旅　中央線から見える山	山村正光	実業之日本社	1985　3刷　カバー 著者署名あり	600
157	新選覆刻　山岳紀行六種（私家版）	松浦武四郎　日本山岳会/編	大修館書店	S53　函	700
166	新選覆刻　播隆上人　迦多賀嶽再興記　信州鎗嶽畧縁起	播隆上人　日本山岳会/編	大修館書店	S53　帙	700
175	わが登高行　上巻・下巻	三田幸夫	茗渓堂	1979・1980　函	1000
208	山岳講座１～６	川崎隆章・近藤等/編	白水社	1954　函	2000
240	登山技術１～３	日本山岳会/編	白水社	1961　函	1000
259	遙かなりエヴェレスト　―マロリー追想	島田　巽	大修館書店	1981　カバー　※著者署名あり	800
261	垂直の散歩	藤木九三	朋文堂	S33　函　※望月達夫宛て著者署名あり	700
263	車窓の山旅　中央線から見える山	山村正光	実業之日本社	1985　9刷　カバー　著者署名あり	600
278	山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗渓堂	1970　函　※著者署名あり	800
281	近代登山の先駆者たち	近藤信行/編	日本山岳会	S48	700
291	わが登高行　上巻・下巻	三田幸夫	茗渓堂	1979・1980　函　※著者署名あり	2000
296	原野から見た山	坂本直行	茗渓堂	S49　函	600
318	日本の名山1 ～ 12	羽賀正太郎・折井健一・近藤信行・白籏史朗/編	ぎょうせい	1983 ～ 1984　函	4000
330	山は満員	渡辺公平	茗渓堂	1975　カバー	600
331	アルプ　特集　串田孫一	山口耀久ほか/編	山と溪谷社	2007　カバー	600
332	忘れえぬ山の人びと	望月達夫	茗渓堂	1986　函　※献呈署名あり	800
334	空にただよう峰	松永敏郎	アポロスポーツ	H3　函　※献呈署名あり	800
338	山に忘れたパイプ	藤島敏男	茗渓堂	1970　函　※著者署名紙添付	800
353	エーデルワイス・シリーズ1 ～ 6	山口耀久・鳥見迅彦・岡部牧夫・川崎隆章/編	角川書店	S43 ～ 46　函	1200
371	日本百名山	深田久弥	新潮社	S40　6刷　函	1000
383	雪・岩・アルプス	藤木九三	梓書房	S5　函	1500
390	覆刻　日本の山岳名著　解題	日本山岳会/編	大修館書店	S50　函	700
396	串田孫一随想集Ⅰ～Ⅵ	串田孫一	立風書房	1977 ～ 1978　函	2000
404	槇有恒全集　Ⅰ～Ⅲ	槇　有恒	五月書房	1991　函	1500

INFORMATION
インフォメーション

◆年次晩餐会に関するご案内

総務委員会

本年の催しは、図書委員会主催の図書交換会、および貴重なシュラギントワイト「アトラス」の展示です。また、アルパインフォトビデオクラブによる山岳写真の展示も行ないます。

広い会場を利用して、多くの会員の方々に見ていただけるようにしました。

講演会は、2012年5月にダウラギリへの登頂を果たし、日本人初となる8000メートル峰14座完全登頂という偉業を達成した、竹内洋岳さんを予定しています。

10月に案内状を発送します。

期日　12月7日㈯

場所　品川プリンスホテル・アネックスタワー5階

◆第31回図書交換会

図書委員会

昨年に続き、図書交換会を年次晩餐会で開催します。

13時、開場。陳列した本をご覧のうえ、開始時間までに購入申込みをお願いします。年次晩餐会に出席されない会員も参加できます。例年どおり、事前申込みも受付けます。

日時　12月7日㈯14時から抽選を開始

場所　品川プリンスホテル　年次晩餐会会場　展示会コーナー

問合　三好まき子

TEL 090（8019）8601

✉ 344mm@mbe.nifty.com

◆第11回日本山岳文化学会開催のお知らせ

11月16、17日に東京慈恵会医科大学の高木会館2号館南講堂で開催される。

16日は、一般演題19題を発表。13時から、秦和寿氏が「山地でのマダニの被害を防ぐ」を講演する。

17日は、9時～12時に山岳医学医療分科会主管、日本山岳会医療委員会後援のシンポジウム、「山中での体と心」①山を想う心―槍ケ岳でのアンケートから―（斎藤三郎）②トレイルランニングの現況と問題点（野田寿恵）③登山時の疲労対策―サポートタイツの効果―油井直子）④山でケガをしたら（野口いづみ）⑤山は身も心も豊かにする（大野秀樹）が講演される。

会員以外も参加でき、当日参加も可能。詳細はHPまたは事務局・中岡久まで。

（http://www.jamc.gr.jp/）

✉ hisa-n@fine.ocn.ne.jp

◆安比高原スキー懇親会のお知らせ

集会委員会

平成26年1月のスキー懇親会は、安比高原スキー場で開催します。

現地集合・現地解散。

日程　平成26年1月18日㈯～20日㈪

費用　スキー参加者：2万1千円（通信費、保険料、懇親会費）

宿泊　安比温泉　高原の宿　安代林業センター

定員　20名

申込　12月20日までに、高橋聰

〒102－0072 東京都千代田区飯田橋2－12－10

FAX 03（3222）0908

✉ syukai@jac.or.jp

＊申込者に詳細案内を送ります。

◆中村あや――山旅の記憶スケッチ展

夫・中村純二と二人だけで長年山歩きの旅を続けてきました。その折々の様々な思いを留めたスケッチ展です。

期日　11月20日㈬～11月25日㈪11時～19時（最終日16時まで）

場所　柴山画廊（中央区銀座5－8－3　柴山銀座ビル2F）

TEL 03（3571）2125

■お詫びと訂正

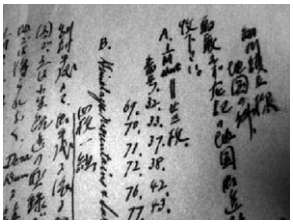
「山」9月（820）号6ページ、第33回日本登山医学会学術集会の報告に間違いがありました。3行「京都大学総合地球環境学研究所」は「大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・総合地球環境学研究所」です。

訂正してお詫びいたします。

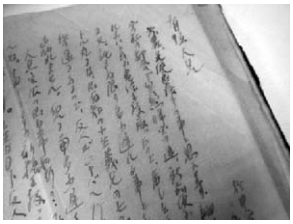
（医療委員会委員長　浜口欣一）

日本山岳会所蔵資料紹介 No.6

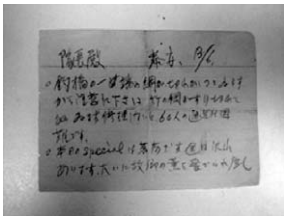
［資産番号］　259 ～ 261
［資 料 名］　三田幸夫の手紙と日記など
［部 門 名］　書簡
［寄 贈 者］　三田静子
［受 入 日］　1992年



①細川護立侯爵に宛てた手紙



②槇有恒に宛てた手紙



③加藤泰安の伝言

前号に続き、第11代会長を務めた三田幸夫より寄贈された資料より、書簡関係である。細川護立侯爵へ宛てたものや槇有恒や谷口現吉らと交わした手紙、1953年マナスル第1次隊遠征中のSama Base Campでの日記、キャラバン中の伝言メモ、渡航関係の公文書、ローマ字で打たれた当時の電報など、貴重な書簡が多い。下記、1931 ～ 1953年に交わされた一部を紹介する。

①は1931年2月25日付け、三田から細川侯爵へ宛てた手紙である。カルカッタ赴任中の三田へ、細川侯爵は槇を通じて地図を依頼した。その地図の送付にあたり、詳細な説明をしている。

「地図の件……A・1/M=23枚、B・himalaya mountaing、Bは訳文の必要がありますので、1/Mの方が解り好く、また一番詳しい地図と思われます……Bは四枚続き、ヒマラヤの全体を一目で見得る便利なもの、小生も愛用申して居りました……1/Mは1枚がまた16枚に分かれていて使用に一番便利と存じます。……」とあり、50ルピー 8アンナ（地図の代金）の数字も見てとれる。

②は1913年3月22日付け、三田から槇へ宛てたもの。前半では細川侯爵へ地図送付の報告、後半では母校・慶應の登高会への期待や夢を語っている。

「……日本の登山界の今の気持ちはどんなふうですか? ……パンディムについて、第一印象から希望の的。2 ～ 3回試みた人もいるがみな断念している。むずかしい。高さは約2万2千、ダージリンから眼前の雲を抜く兜型の尖峰。登高会で2 ～ 3カ月学校をすっぽかしてこられる奴はいませんか?……ダービー競馬で当たれば船を一行のためにチャーターしてもいいし……」と、ユーモたっぷりの文面が続く。

③は1953年6月13日、キャラバン中の加藤泰安がノートを破って走り書きした伝言。

「隊長殿　泰安　13/6　○釣橋の一端の綱が切れかかっていますから注意して下さい……修理しないと60人の通過は困難です。○本日のspecialは茗荷です。途々沢山あります……」とある。

これら書簡にじっくりと目を通すことにより、当時の山岳界の一端を知ることができる。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryo102@jac.or.jp　**（資料映像委員会）**

❖編集後記❖

●図書紹介に取り上げられている『一歩ずつの山歩き入門』の著者四角友里さんを、私は勇気のある人だと思う。自分の思いを貫くことも、好きなことを継続していくことも、信じた道を進むことも、ときとして勇気のいることだ。

●上高地から涸沢まで、クライマーは飛ぶようにして登っていくかもしれないが、そんな道のりを当初彼女は、2日間かけないと歩き通せなかったと、自分で話している。力不足とみる人もいたようだが、あるベテラン編集者が、「ほかの人の2倍山を楽しみ、味わい尽くしたんだね」と話してくれたそう。山への向き合い方は人それぞれ。彼女は彼女の山を歩き続け、その10年の歳月が込められた1冊。登山者への愛あふれるメッセージが書かれている。　**（柏 澄子）**

日本山岳会会報　山　821 号

2013年（平成25年）10月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京（03）3261-4433
FAX　東京（03）3261-4441
発行者　日本山岳会会長　森 武昭
編集人　柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社